

3学期の授業づくりに向けて パート4 「補足資料5」編

3学期がスタートして3週目となりましたが、子供たちは進学・進級に向けて少しずつ意識が高まってきているのではないのでしょうか。本号では、追加作成した「自ら学ぶ子供の育成リーフレット」補足資料5・6の内容の詳細についてお伝えします。

子供から引き出したい動きや気づきを構想し、ルールや場、用具などを工夫して設定します。

例) 小学校5年 ゴール型「バスケットボール」(守り3人对攻め4人のゲーム)

I つかむ (課題を把握し、見直しをもつ)

1回目のゲーム

チーム・全体での話し合い

バスが回ってこないし、シュートも打てない…

ゲームをして感じたことは?

バスがきても相手にボールを取られちゃうんだ…

私たちのチームは、遠くからしかシュートできなかったよ。

共通の問い
どうすれば、バスが通るのかな?

教師の関わり ポイント③

この教師は、「まずはやってみる」ということを大切に、実際に動いたからこそ感じることできた難しさや課題となる部分を子供自らが見出すように働きかけ、自分事としての「問い」をもたせるようにしています。

運動に出合ったばかりの子供たちがもった課題はまだぼんやりとしています。しかし、実際に動いたからこそ感じた課題から問いを設定していく学びを積み重ねていくことで、単元の後半には、「自分(たち)は、〇〇をやっていく」という明確な課題をもつようになり、1回目のゲームを経なくても、導入で課題や課題解決への見通しを引き出すことができるようになってきます。

II 深める (追究し、解決する)

チームごとの作戦タイム

チーム内の練習

2回目のゲームへ

ボールを取られちゃった時は、相手が近くにいたんだよ。

相手がいらない場所ってどこなの?

作戦ボードを使って考えようよ。(ICT活用を含む)

このチームの作戦名は何作戦?

チームの課題
相手がいらない場所に移動しよう

教師の関わり ポイント④

子供たちが明確な課題をもったことを確認したこの教師は、「バスの仕方」や「バスの受け方」などを指導するのではなく、子供自らが学びを高めていくよう任せ、委ねています。また、作戦タイムの終盤で、「このチームの作戦名をつける」と何作戦?」などの問いかけをし、作戦に対する意識付けを強めるように支援しています。

ゲーム領域は、「ボール操作」と「ボールを持たない時の動き」の2つの運動局面を見つめさせていくことが大切です。学習指導要領を確認し、どのような動きや気づきを求めるのか明確にして動きの変容を見取っていきましょう。

III まとめる・振り返る

チームまたは全体での話し合い

みんなで課題を解決しようとしていたから、このチームは話し合いができていたんだよね。

今日の学習を振り返って、次の学習につなげていきたいことは何か話し合いたいです。

相手がいらない所に移動したら、うまくいく時もあったけど…味方が遠くになっちゃった。

相手チームは敵の前に移動していたよ。

次時への問い
他にもバスを受けられる場所はあるの?

教師の関わり ポイント⑤

この教師は、チーム内で共有した課題を意識しながら動き合っていた子供たちの学びの姿から、次時への新たな問いをもつであろうと見取っています。そして、チーム全体で同じ思いをもって動き合っていたことを大いに称賛し、その学びのよさを価値付け、子供たちに実感させています。

学年が上がるにつれて、学んできたゲームでの気づきと、今行っているゲームに求められている動きを関係付けて学んでいくようになっていきます。教師は、それまで、どのような学びをしてきたのかを確認しておきましょう。

課題となる部分ばかりに目を向けさせるのではなく、動きの変容したチームや子供を見取り、成長した理由やよさに気付かせていくことも大切です。

「次の課題は〇〇だな」、「次は〇〇をやっていこう」といった次時に向けた問いを引き出していくことで、学びが連続していくようになります。

3学期の授業づくりに向けて パート5 「補足資料6」編

「授業」における生徒指導の実践上の視点を生かした例

自己決定の場の提供 → **自分（たち）で決めさせることで、必要感と責任感を伴わせます。**

子供から問いや思い・願いを引き出す
 やってみたいことを引き出す

これをやると決めたいぞ！
 みんなのために、〇〇をしたい！

〇〇をやりたいんだね！一人一人の力を合わせればできると思うよ！

自己存在感の感受 → **自分が学級や授業の役に立っているという実感をもたせます。**

全員がアウトプットする場を設け、授業へ参加できたことやよりよい考えをもつことができたことへの実感をもたせる
 友だちや先生から認められる場を設ける

〇〇さんの説明のどこがよかったかな？
 今、自分が説明した考え方は伝わったかな？

考え方の順序を分けて説明していたところがよかったので、自分も真似したいと感じました。

共感的な人間関係の育成
安心・安全な風土の醸成

つまずきに寄り添う
 学び方のよさを価値付け、そのよさを全体に広げる

例) 今日の授業で、すごいと感じたことがあったんだけど、どんなことだと思いますか？
 この学級でよかった！
 次も(は)こういう学び方をしたいこう！

例) 「ここが分からない」と言ってくれたから、みんなの学びが深まったのですね。
 例) 今日の授業で「次はこうすればもっとよくなるな」ということがあるんだけど、何だと思いますか？

「何をする？」という教師の問いかけの他に、「〇〇をすることで、〇〇さん(みんな)は、どうなってみたいの?」、「じゃあ、今回は、〇〇のようになっていることが目標だね」など、具体的ななってみたい姿をイメージさせていく問いかけをしていきます。「何のために」という目的意識とともに、具体的ななってみたい姿を教師と一緒に共有していきましょう。

「自己決定の場」における「具体的ななってみたい姿」を、子供たちも教師もイメージしているからこそ、子供たちは活動することへの目標をもち、意味ややりがいを見いだしていきます。そして、活動後の子供同士による相互評価や教師による価値付け、励ましの言葉により、自分(たち)のよさや存在価値を与え、自己存在感を感受させていきます。

目立っている、活躍している子供ばかりに目を向けるのではなく、学校や学級の目指す子供の姿や、コツコツと努力している子供、発言は少ないが、じっくりと考え、行動している子供、授業以外の生活場面でよさを発揮している子供、友だちのつまずきに寄り添って、共に高め合おうとしている子供、失敗から学ぼうとしている子供の思いや願いを見取っていきましょう。そして、見取った子供の思いや願いのよさを他の子供に気付かせたり、失敗したことから大切なことは何かを学ばせたりしていく教師の意図的な関わりが、「共感的な人間関係の育成」や「安心・安全な風土の醸成」につながっていきます。

子供たちの心身の安定を図り、自ら動き出す子供を育成していくためには、全教職員が、一つ一つの教育活動における目標や育てたい資質・能力から「具体的な目指す子供の姿」を共有し、一貫したぶれない軸や視点をもって子供と接していくことが求められます。

まずは、「自己決定の場」を与えていくことから始めてみましょう。なぜなら、他者から決められたことは他人事であり、自分事にはならないからです。「自ら学ぶ子供の育成リーフレット」や「補足資料1～6」は、授業づくりだけでなく、学級づくり、人間関係づくりにつながることを示していますので、ご活用ください。

生徒指導の実践上の視点到留意し、教科等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを進めていきましょう！

要請訪問Ⅱでは、リーフレットの内容や学級づくりに関する全体指導を、要請訪問Ⅲでは教師に対する個別支援を行っていますので、ご活用ください。

